

2024年2月18日(日) 第二礼拝「なだめの香り」レビ1章9節

神様の好きな香りがあります。それは「なだめの香り」です。聖書の中で「香り」という言葉が一番多く書かれているのはレビ記です。「なだめの香り」とはいけにえを燃やす時の香りで、「いけにえを燃やし捧げる」とは礼拝を意味します。その礼拝を捧げる人にはイエス様の香りがします。神様はこの香りをととても喜ばれます。

第一番目、全焼のいけにえです。傷のないいけにえを選んで按手し、罪を告白して、その罪をいけにえに転嫁し、全て焼いて煙にしました。これが主へのなだめの香りです。イエス様は私たちの罪のために十字架につけられ、全焼のいけにえとなりました。私たちの罪は一つも残らずイエス様に移され、私たちは赦されました。

罪とは自分を義とする生き方のことです。カインは自分が正しいと思う捧げものをしたので神様に受け入れられませんでした。逆にアベルは神様が望む捧げものをしたので、聖霊の火が臨み、それは全焼し、神様に受け入れられました。「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。」(マタイ 16:24) 私たちが深く砕かれた心、悔いた心でこの全焼のいけにえとなられたイエス様を見る時、私たちの義(自我)もまた死ぬのです。このなだめの香りを神様が最も喜ばれます。

第二番目、穀物のいけにえです(レビ記 2:2,11,13)。穀物の捧げものは小麦粉、油、乳香(祈り)を焼いて煙にしました。父の御心に従順され、聖霊の油注ぎを受け、いつも祈られていたイエス様をあらわします。「キリストは神の御姿である方なのに、神のあり方を捨てられないとは考えず、ご自分を無にして…実に十字架の死にまでも従われました。」(ピリピ 2:6~7) 穀物の捧げものにはパン種(教え、主義など)や蜜(情欲)を入れず、塩(永遠の契約)で味つけしました。純粋な御言葉だけが私たちに残ることを、主は願っておられます。また、クリスチャンにはイエス様の塩気、キリストの香りがあります。「神は…至る所で私たちを通して、キリストを知る知識のかおりを放ってくださいます。私たちは、…神の前にかぐわしいキリストのかおりなのです。」(II コリント 2:14~15)

第三番目、和解のいけにえです(レビ記 3:1)。神様が私たちの罪の審判を全てイエス様に下され、罪の代価を支払ってくださったことを信じ受け入れることで、神様との和解が成立します。「その十字架の血によって平和をつくり、御子によって万物を、ご自分と和解させてくださったからです。」(コロサイ 1:20) 「神の和解を受け入れなさい。」(II コリント 5:20) 私たちが神様との和解を受け入れる瞬間、神様の憐みの御座に導かれます。また、神様と和解した私たちには兄弟姉妹と和解する義務があります。エジプトの総理となったヨセフは、かつて自分を殺そうとした兄弟が現れた時、彼らを憐れむ心が与えられ赦しました。ヨセフが神様の摂理とその主権を信じたことにより、兄弟たちに復讐せず和解することができたのです。同様に人を赦し和解する時、私たちの心にも主の憐みの御座が設けられ、多くの天使の助けを受けて、全てが良くなり守られるのです。アーメン！